

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	齋藤 孝博
論文担当者	主査 木島 貴志
	副査 八木 秀司
	副査 垣淵 正男
学位論文名	Nasal Symptom Questionnaire: Our Proposed Scoring System and Prognostic Factors in Chronic Rhinosinusitis (鼻症状アンケート：我々の提案する慢性鼻副鼻腔炎におけるスコアリングシステムと予後因子)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>慢性鼻副鼻腔炎(CRS)は様々な症状でQOLが低下し、自覚症状やQOLの評価が重要である。申請者らは独自の簡易化鼻症状質問票(NSQ)を考案し、その妥当性と有用性を検証し、内視鏡下副鼻腔手術(ESS)によるNSQスコアの改善の予測因子を評価した。</p> <p>2015年6月～2018年4月に当院でESSを受け術前後にNSQの回答が得られたCRS患者91名を対象とした。NSQの妥当性は、健常者121名を対象とし、うち61名において再現性評価のため再調査(test-retest)を行うことで評価した。NSQは症状関連8項目とQOL関連2項目の計10項目からなり、各項目0～3点の4段階評価でスコア化(30点満点)した。Visual analog scale (VAS)による自覚症状の総括スコアの間診も行った。術後NSQスコアが術前に比べて3点以上減少した場合、改善と定義した。</p> <p>ROC分析の結果、NSQスコア4点をcut-off値とした場合に、感度0.9341、特異度0.7769でCRSの存在を予測できた。再調査を行った61名の健常者において、内部一貫性を示すクロンバッハのα係数は0.8696と質問内容の信頼性が確認できた。また、test-retestの信頼性係数0.8131、試験と再試験の間の強い相関性($r_s=0.7706$)と、再現性の信頼性も確認できた。以上より、NSQの妥当性が証明された。さらに、NSQスコアとVASスコア間には、術前($r_s=0.6007$)術後($r_s=0.5975$)ともに有意な相関がみられた($P < 0.0001$)。</p> <p>ESSの効果に関しては、術前後のNSQスコア中央値が12(0-18)から4(3-25)と有意に低下していた($p < 0.0001$)。次に、術後のNSQスコア改善に関連する因子を解析したところ、単変量解析でポリープスコアとCTスコアが有意な因子($p < 0.05$)として残り、さらに多変量解析でCTスコアのみが有意な因子($p < 0.05$)であることが判明した。術前CTスコアが10点以上の患者群で術後NSQスコアが改善した割合(85.1%)は、9点以下の患者群(68.2%)よりも有意に高かった($p < 0.05$)。以上より、NSQのCRS診断における妥当性と信頼性、および術後効果判定における有用性および、術前CTスコアが術後効果予測のよい指標であることが明らかとなった。</p> <p>本研究はCRSの診断およびESSの術後効果予測に関する新しい知見を示唆する研究であり、学位論文に十分値するものと評価した。</p>	